



講演録

ワタンの100年

～シリア近現代史から考える Homeland～

ナジーブ・エルカシュ

2020年12月18日（金）

京都大学（総合人間学部）

主催：科研基盤研究（A）「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」

ナジーブ・エルカシュ [ジャーナリスト]



1973年シリア生まれ。ベイルートアメリカン大学を卒業後、ロンドンフィルムアカデミーで映画制作を学び1997年に来日。東京大学大学院、名古屋大学大学院にて映画理論を研究。

テレビ番組制作会社リサーラ・メディアの代表として1998年から日本や北東アジアを取材し、France 24 Arabic（フランス国営テレビのアラビア語チャンネル）やアル＝アラビヤ、クウェート国営テレビ、オマーン国営テレビ、ドバイテレビ、アル＝シャルク・アル＝アウサト新聞など、アラブ諸国やヨーロッパのメディアに取材を配信。東日本大震災以降は、東北を集中的に取材している。

アラブ・アジア・ネットワーク（A-Net）の代表として、文化交流の分野でも活動。2005～2008年東京アラブ映画祭（日本国際交流基金主催）や山形国際ドキュメンタリー映画祭ではアドバイザーを務めた。2008年にはアラブ・フェスティバルを主催し、アラブのジャズ音楽やアニメオタク文化を紹介。Facebook ページ【[シリア文化の家](#)】の運営も行っている。

文化外交も専門にしている。2006～2007年、駐日クウェート大使館における教育・文化事業を担当、2005年愛知万博、2010年上海万博（中国）、そして2012年麗水万博（韓国）において、参加したアラブ諸国の広報・報道事業を担当した。2021年には東京五輪、ドバイ万博もカバーし、五輪や万博など「メガイベント」という分野におけるパブリック・ディプロマシーやソフト・パワーのあり方を考えている。

ワタン研究プロジェクトでは、人間と「ワタン/Homeland」の関係を人文的視座からグローバルに考究しています。2020年12月18日、プロジェクトの一環として、京都大学にて、ナジーブ・エルカシュさんに「ワタンの100年」と題し、シリアというワタン/Homeland をテーマにご講演いただきました。その内容を加筆・修正の上、ここに採録します。

ワタンの 100 年 ~シリア近現代史から考える Homeland~

ナジーブ・エルカシュ

1. シリアという国

シリアは、中東の中でも中途半端な存在です。地理的に見ても、アイデンティティが曖昧です。国土の西側は、地中海に面しているので地中海世界ですし、東側はユーフラテス川が流れているのでメソポタミアの世界です。メソポタミア世界と地中海世界は全然違います。

私の故郷は地中海の近くです。とても高い山の上なので、寒くて、雪もたくさん降ります。そういう地域もあれば、日本人には本当に想像がつかないくらい緑豊かな、典型的な地中海の景色の地域もあります。またシリア砂漠もあり、雪が降っている所から車で東へ 2 時間くらいドライブするだけで砂漠に行けます。その間には緑地などあって、オリーブ畑や果樹園を経て、少しずつ土地が乾燥していきます。有名なパルミラ遺跡¹に行くと、周りの色が少しずつ緑から黄色になっていくことが、シリア人の私にとっても印象的です。景色の変化にともない、文化も民族や背景がそれぞれちよつとずつ変わってゆくのを肌で感じます。

それに比べてレバノン¹は、シリアよりもずっと小さな国ですが、ワタン/Homeland の意識が強いです。なぜならレバノンは、イメージがはっきりしているからです。レバノンは地中海沿いの山地で、とても小さくて、車で 2 時間もあれば端から端まで行けます。レバノンというと特定のイメージが湧きます。けれどもシリアといたら、地中海世界なのかメソポタミアの世界なのか、ダマスカスという古代都市の世界なのか、どういう世界が浮かぶかは人それぞれです。お隣のイラクは、メソポタミアに大体ぴったりとあてはまる位置なので、イラク人のワタンの意識も非常に強いです。エジプトはナイル川の世界であり、エジプト人のアイデンティティも結構はっきりしています。湾岸諸国もアラビア半島、ペドウィンの世界、今は石油の世界というふうに、イメージがはっきりしています。しかし、シリアは中途半端です。

シリアは、アラビア半島の砂漠世界と地中海世界の間です。シリアの歴史全体を見ると、ローマ帝国のとても重要な一部だったし、ギリシャ帝国のとても重要な一部でもありました。そして、アラビア半島から出てきたイスラーム文明のとても重要な一部でもあり、ダマスカスはイスラーム帝国の最初の都でした。そういう感じで、アラブ世界と地中海世界の境目がシリアです。それがシリアのワタンの意識に非常に大きな影響を与えています。

私は 2003 年から 2004 年まで、名古屋市に雇われて、親善大使のようなことをして

¹ ダマスカスから北東に約 230km、シリア砂漠のなかにある都市遺跡。ローマ様式の建築物が多く残存しており、1980 年にはユネスコの世界文化遺産に登録された。

いました。中部地方の大学やロータリークラブから幼稚園の子どもたちまで、シリアのことを紹介しました。私はジャーナリストとして、そういう文化交流も仕事にしています。こうしたときは、たくさんの情報よりも一つにフォーカスしてあげた方がいいのですが、自分の国を紹介する場合、それはちょっと無理だと思いました。シリアはどういう国なのか、砂漠の国なのか、アラブの国なのかといえば、完全にはそうでない。若いときは女性と出会うと「地中海の国だよ」と言っていました。その方がおしゃれだからです。

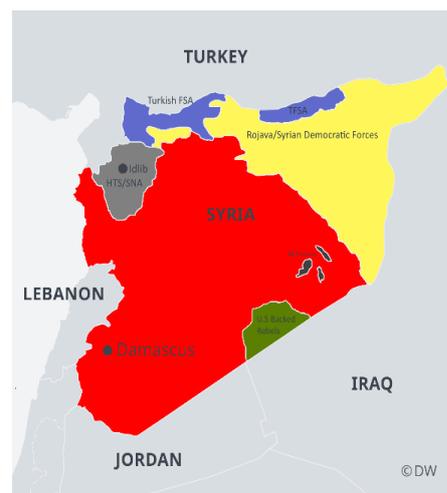
名古屋で親善大使をしていた当時、子ども向けにシリアのキャラクターを作りました。おにぎりを持っている女の子の絵です。シリアはほぼ三角なので、おにぎりの形にちょっと似ています。シリアは海と川と砂漠の三つでつくられている国なので、おにぎりを持っている女の子の名前は「うみかわさばこ」です。それくらい何か無理なことをしないと、シリアは説明できないということです。

2. シリアの現状

現在、シリアは紛争下にあり、ダマスカスを拠点にする軍事独裁政権が存在しています。それに対する民主化運動が2011年に始まって、今は紛争状態になっています。

大雑把に言うと、赤の部分、中央政府が支配しているエリアです。黄色の部分、クルド勢力の支配しているエリア。そして灰色のエリアには、さまざまな反体制勢力が存在しています。ここは、反体制勢力だけでなく、民主化の活動家もシリア国内で唯一活動できる地域である、ということはとても大事なので忘れないでください。

この黄色の地域は、アル=カーイダ関係の何かが支配している、ということだけでなく、ここにいる人間は今も自由なシリアを望んでいるし、市民社会はいろいろな活動を大変活発に行っています。私がシリアの民主化を支援しているからそのように言っているわけではなくて、この灰色のエリアで、誰がごみ収集しているのか、誰が医療を提供



Just World Educational · Slide 1 Detail Map of Syria from 2017 (CC BY-SA-NC)

しているのか、誰が教育を提供しているのかということ、シリア人の市民団体です。空爆されながら、そして現地にいる過激派にいじめられながら、対立しながら、そういうことをしているのです。私はこのことを軽く見たくないと思っています。逆に、ここで今、行われていることから世界が学べるところがあるのではないかと思います。

ここでクイズをします。ここに6人の人物がいます。それぞれの人の仕事を簡単に説明して、最後にこの講演の出発点にするために簡単な質問をしたいと思います。

左上はウサーマ・ビン・ラーディンですね。アル=カーイダの最初の指導者で、2001年の9・11、ニューヨークとワシントンの同時多発テロ事件を起こした人物です。その9・11では、飛行機のハイジャックがありました。ウサーマ・ビン・ラーディンの



[PNG - Osama Bin Laden \(CC BY-](#)



[Wikimedia - George Habash \(CC BY-](#)



[Wikimedia - Nayef Hawatmeh 2017 \(cropped\)](#)



[Wikimedia - Michel Aflaq 1963 \(CC BY-SA 3.0 NL\)](#)



[Wikimedia - Aziz cropped \(CC BY-SA 4.0\)](#)



[Public Domain Mark 1.0](#)

場合は、世界の注目を集めるためにハイジャックをやったのか、ただ欧米憎しでやったのか分かりませんが、このハイジャックという発想はアラブでは 1960 年代に始まりました。

ハイジャックを始めた一人が真ん中上のジョルジュ・ハバシュという、パレスチナ解放人民戦線 (PFLP) の指導者です。1960 年代から 70 年代にかけて、たまに日本赤軍と協力したりもしながら、ハイジャックをやっていました。そして、彼の仲間だったのが、独立してパレスチナ解放民主戦線 (DFLP) をつくったナーフ・ハワートメ、右上の人です。左下はミシェル・アフラクという、バアス党の設立者です。バアス党は唯一のアラブ・ナショナリズムを掲げる政党で、一つの国だけでなくいろいろなアラブの国に存在しています。そのバアス党が 1960 年代からシリアとイラクの両方で政権を握ることになりました。イラクの場合は 2003 年のイラク戦争まで続き、その後のアメリカの占領によってバアス党の時代は終わりましたが、シリアではバアス党が今も続いています。

イラクのバアス党のサッダーム・フセイン元大統領が亡くなってからは、イラクのバアス党党首にドゥーリーが就いたのですが、そのドゥーリーが先週亡くなったというニュースが入って、この間、その取材をしていました。今度は誰がイラクのバアス党のトップになるかという、スーダンのバアス党の指導者が全体の党首になるということです。

その話のどこが面白いかというと、バアス党の指導部は二つに分かれていて、^{キヤード}民族

指導部というのがアラブ全体の指導部で、その下に地域指導部というのがあります。「クトリーヤ」はひとつの国レベルという意味で、ちょっと軽視しているような言い方です。まずは民族レベルの指導部があって、その下にそれぞれの国の指導部があります。要するに、それぞれの国は臨時のものであって、いつかアラブを統一させるから、それまで取りあえず今の臨時のものとしてイラク、シリア、スーダンそれぞれの国別指導部があります。今はスーダンの国別指導部の代表が、全体の民族指導部を握るという話になっています。

そのすべてのアラブの国に関わるアラブ・ナショナリズムの決定的な存在、アラブ世界の自民党のような大きな政党の設立者がミシェル・アフラクです。そして、イラクのサッダーム大統領時代の副首相だったターリク・アジーズが真ん中下です。最後に、そのイラクを占領した当時のアメリカ大統領で、サッダーム・フセイン政権を崩壊させたのが右下のブッシュです。

そこでクイズです。この中で一人だけ宗教が違う人がいます。どなたでしょうか。

会場から「ブッシュさん」

ナジーブ そう見えると思いますが、実は違います。ウサーマ・ビン・ラーディンだけがイスラーム教徒で、あとは皆、キリスト教徒です。これはクイズではなくて、ショックセラピーでしたね。

何を言いたいかというと、非イスラーム教徒のアラブ人が、アラブのアイデンティティにどれだけ貢献したか、ということです。その「貢献」というのは、彼らがやったことをテロリズムだと思っているアラブ人もいるし、それを支持している者もいますが、いずれにしろ、大きな役割を果たしたことは間違いありません。バアス党というアラブ・ナショナリズム最大の政党をつくった人物やパレスチナのために戦った者たち、あるいはイラク戦争時代の副首相、みんなキリスト教徒でした。そこから私の話に入りたいと思います。

3. シリアのワタン

シリアのワタンの話をするのと、諸民族の話をしなければなりません。シリアのアイデンティティ、シリアの人口、シリアの文化にずっと貢献したのは、アラビア半島です。ひとえに地理的、自然的な理由からです。今のアラビア半島を見ると砂漠です。でも、実は数百万年前は全部、森でした。

この講演で数百万年前の話をするのはおかしいかもしれませんが、アラビア半島が乾燥して砂漠化するのにもなって、アラビア半島から北に逃げていく人間の動きがシリアの基本的な形をつくりました。

アミン・マアルーフの『アイデンティティが人を殺す』² という本があります。その中でマアルーフは人間の「多層的なアイデンティティ」の話をしています。例えば、

² アミン・マアルーフ 『アイデンティティが人を殺す』小野 正嗣訳、ちくま学芸文庫、2019年 (Amin Maalouf, *Les Identités meurtrières*, Grasset, 2008)。

私はアラブ人でもあり、イスラーム教徒でもあり、シリア人でもあり、いろいろな帰属があります。これは一人の人間に関する多層的なアイデンティティの話です。しかし、シリアというワタンも、そうしたタマネギみたいな多層のアイデンティティがあります。シリアの場合、いつも上の層は外から、ヨーロッパから来ることが多かったのですが、もっと深くに、いつも静かに横たわっている層があります。

歴史の話になると、どうしても大きな帝国の話が中心になります。ローマ時代と例えば、皆さんはつきり分かりますね。アラブ王国時代というと、ローマの2倍ぐらい古い時代のことです。4500年前にシリアのユーフラテス川流域にあったマリ王国は、セム族の小さな王国ですが、その文明はとても進んでいました。どれぐらい進んでいるかという、クリーニングの領収書が残っています。4500年前に、クリーニングのサービスがあったのです。当時は本当に世界のニューヨークだったのですね。

文明はすごく進んでいましたが、とても小さい国でした。なので、歴史家によればローマ以前からこの地域にはいろいろな発明や文明の始まりがあったけれども、それらの文明の話は、歴史やメディアや映画ではメジャーな話題にはなりません。シリアは、そういう小さな王国が集まっていました。アラビア半島から出てきたアッシリアや、あるいはバビロン、それからフェニキア人もそもそもセム族で、アラビア半島から来た人々です。そういう人々がシリアにゆっくりと人口の変動をもたらしました。このセム族のアイデンティティが、その後ずっと今に至るまで、シリアの歴史で静かな役割を果たして、たまに強い役割を果たすこともあります。

このことを理解することが、シリアのワタンを理解する上でとても大事です。例えばギリシャ文明がシリアに入って、ダマスカスがそのローカルな都だったとき、ダマスカスではギリシャ語が話されていました。しかし、田舎の農家に行くと、セム系の言葉がずっと残っていました。

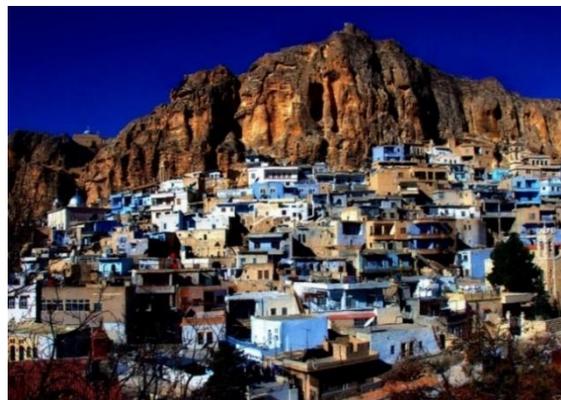
その後、一番大きなセム族の移民はイスラームそのものです。イスラームはアラビア半島からまずシリアに入って、そして北アフリカ、アジアに広がったのです。いつもアラビア半島から出ると、必ず最初はシリア、ダマスカスに入ります。7世紀、アラビア半島が最終的にイスラームの国になりますが、それが帝国になる第一歩はまず、アラブ・イスラーム軍がシリアに来ることから始まりました。こうして、イスラーム帝国の最初の首都はシリアのダマスカスになりました。

その後、首都がバグダッドに移ったり、カイロに移ったり、イスタンブールに移ったりしましたが、イスラーム軍がアラビア半島から出たときの最初の一步目はシリアでした。それは7世紀の話ですが、20世紀になっても結局、アラブ人がオスマン帝国から離れると決めてアラブ革命が起きたとき、全く同じルートで、マッカ辺りからアラブ軍がまずはシリアに来て、シリアで会議を開いて、アラブ王国³がつくられました。首都はダマスカスでした。

³ 1920年、ハーシム家ファイサル1世（ファイサル・ビン・フセイン）が「シリア・アラブ王国」の独立を宣言。しかし、フランス軍侵攻によりファイサル1世は追放され、シリアはレバノンとともにフランスの委任統治領になる。

そのようなパターンが、いつもシリアとアラビア半島を強く結びつけました。こうしたパターンは、現在、アラブの大国であるエジプトにはありません。モロッコにも当然ありません。言語もアラビア語だけではなくて、いろいろなセム族の言葉がシリアには残っています。

ここでとても重要な 1 枚の写真をお見せします。マアルーラ⁴ という村の写真です。現在、シリアで唯一、アラム語を話している村です。2020 年の今も、その事実は変わりません。マアルーラでは今も、アラム語を話しています。ギリシャ人が来ても、ローマ人が来ても、アラブ人が来ても、マアルーラではアラム語を話し続けました。それぐらい強いセム族の文化がシリアには存在しています。普段はあまり見えない部分ですが、しかし、それもシリアのワタンの一面です。



Jose Javier Martin Espartosa - MAALOULA, SIRIA 1209 27-12-2010
(CC BY-NC-SA 2.0)

先ほど、キリスト教徒がどれだけ貢献したかという話をしましたが、イスラーム文明が広がって最初にシリアに入り、ダマスカスが首都となったウマイヤ朝のシリアや、その後バグダードが首都になったアッバース朝のイラクには、それ以前からキリスト教徒のマイノリティがいました。

まず、シリアのウマイヤ朝の場合、砂漠から来たアラブ人は大きな国の権力を握るのは初めてなので、新しく生まれたイスラーム国家のマネジメントをどうすればいいか分かりませんでした。そのため、イスラーム帝国の前にダマスカスに存在していたビザンツ人に国の回し方を学ぶことになりました。シリア人のキリスト教徒たちが、新しくやって来たイスラーム教徒にそれを教えたのです。それで、彼らはとても大きな役割を果たしました。ダマスカスを首都としたウマイヤ朝の中で、シリア人のキリスト教徒（シリアック）の人たちが、ビザンツ人の国のやり方をアラブ人に教えて、新しくイスラーム帝国が成り立ちました。

後に、イラクから来た別のアラブの部族がウマイヤ朝を倒して、今度はアッバース朝をイラクにつくりました。この頃になると帝国創設段階の不安などは落ち着いて、いろいろなことを大規模にできるようになりました。バグダードでは、バイト・アル＝ヒクマ（知恵の館）⁵ という世界最大の図書館・研究所をつくって、今度はアラブ・イスラームの思想や科学をつくりたいという話になりました。そのときも、アラブの

⁴ ダマスカスの北東 56km、ダマスカス郊外県にある村。住民のほとんどがキリスト教徒（ギリシア正教、メルキト派カトリック）で、現代西方アラム語が現在も話される数少ない場所である。マアルーラには聖サルキス修道院、聖テクラ修道院をはじめ、多くの修道院、教会、神殿がある。

⁵ 930 年、アッバース朝カリフのマームーンが首都バグダードに建設した研究機関。ピタゴラス、プラトン、アリストテレス、ヒポクラテス、ユークリッド、プロティヌス、ガレノスらをはじめとするギリシア語の諸文献がアラビア語に翻訳され、数学、物理学、天文学、医学、化学、哲学、工学等の諸分野が大いに発展することとなった。

キリスト教徒たちの役割は不可欠でした。彼らがギリシャやローマ時代の本を全部、アラビア語に翻訳したのです。どれだけ正しい話か分からないのですが、当時、イスラームのカリフがそういう大事なギリシャ語の本をアラビア語に翻訳する人に対して、その本と同じ重さの黄金を与えたそうです。

シリアでは多数の文明が興って都市文化は変わっても、田舎の文化は変わりませんでした。都市の文化、田舎の文化、ヨーロッパから来た文化、そして、そもそも静かに田舎に住んでいるセム族の文化があります。そして、アラビア半島はシリア文化の源の一つでした。

余談ですが、私は今、浅草橋に住んでいます。みんなは「浅草ですか」と言うので、「いや、浅草じゃなくて浅草橋です」と言っています。浅草はとても輝かしい観光地ですが、浅草橋は職人の街で、小さなお店でレザーや包丁などいろいろなものを作っている、素晴らしい人たちがいるのです。私にとってローマ帝国は浅草、スターの存在は浅草ですが、本当の文化を作っている人たちは浅草橋の職人というイメージです。

4. シリアの少数派

アミン・マアルーフさんの本にもそういう話があるのですが、マイノリティが歴史をつくるというか、歴史を主導するということがよく言われます。

シリアの歴史における少数派の役割は、先ほどお話ししましたが、人口で計るマイノリティとは別に、権力との距離で考えられるマイノリティというものがあります。シリアの場合、キリスト教徒の人たちはずっと大事にされてきた、本当に基本的な存在ですが、権力は握らないという曖昧な存在で、その曖昧な存在が曖昧なワタンという性格をつくりました。

ですから、シリア人は自分が生きている地域のことを話すと、はっきりしたことを言えないのですね。ローマのとても大切な一部でありながら、シリア人はローマ人ではない。アラブが入ったときも、アラブの国にはなりませんでしたけれども、[アラブ以外の]セム系のいろいろな諸民族が存在していました。

ちなみに面白い事実として、イスラーム文明がシリアに入ったときに、短期間でみんなイスラーム教徒になったと思いがちですが、数百年間かかったのです。数百年の間、シリアの人口のマジョリティはキリスト教徒のままでした。シリアにおいてイスラームがマジョリティになったのはサラディンの時代⁶です。ウマイヤ朝、アッバース朝、イスラームの黄金時代は全部、シリアの人口的マジョリティはキリスト教徒でした。そういう意味では、シリアのセム族はシリアの先住民とすることができるかもしれません。

5. 信仰のワタンから言語のワタンへ

⁶ サラーフッディーン (Salah ad-Din, 1137-1193)。スンナ派イスラーム王朝のアイユーブ朝の創始者。イラク北部ティクリート生まれ。欧米などではサラディンとも呼称される。十字軍勢力からイェルサレムを奪還し、エジプト、シリア、イエメンなどの地域まで支配を拡大した。

イスラーム帝国の成立から 1918 年まで、基本的にシリアのワタンはイスラームのウンマ（共同体）のことでした。しかし、すべてのシリア人が、自分のワタンはイスラームのウンマだと思っていたかという点、そうではありません。イスラーム教徒ではなかったシリア人もたくさんいました。イスラームの当初から、ムスリムのワタンはイスラームのウンマでしたが、マイノリティの立場としては、「それは、私たちのワタンとは違う」のですが、おとなしくしていました。そして 100 年前、おとなしかったマイノリティたちが主張する時代が始まります。アラブ人は、もう宗教は嫌だ、言語に基づいた近代的な国家をつくりたいと考えて、100 年前、トルコ人とアラブ人の「離婚」が起きました。

6. マイノリティが提案するワタン

その後は、マイノリティが次々と提案するワタンが出てきます。「マイノリティが提案する」と言いましたが、マジョリティの人もイスラームの人も同じように考えた人はたくさんいました。19 世紀のナフダ時代⁷ の知識人たちの中でも、イスラーム教徒のザフラーニー⁸ やキリスト教徒のブスターニー⁹ やヤズィーゾー¹⁰ たちはアラビズム（アラブ主義）¹¹ を訴えました。

しかし、マイノリティとマジョリティの関係はいつも複雑でした。例えば、オスマン帝国はアラブ人を抑圧して暗黒時代をつくった、と私たちは学校で教わります。シリアの学校はアラブ・ナショナリズムという立場から教育しているので、オスマン帝国を否定するのです。オスマン帝国は本当にそんなに悪いのかと、今になっては思います。たしかに最後の頃は、間違いなく抑圧的だった時期もありました。なぜなら、トルコ人もアラブ人と一緒にいたなくなってきたから、同じ国家だと思わなくなってきたからです。それで、そうした対立が起こったのですが、200 年前、300 年前、そうだったかということ違うかもしれません。今のイデオロギーであふれたシリアの学校では、オスマン帝国を完全否定する傾向があります。

そういう意味で、アラブ人は、オスマン帝国から脱したら近代化を果たせる、という単純化されたイデオロギーに基づいて国づくりを行いました。言語に基づいた国にしたら問題がないという単純な考え方で、アラブ・ナショナリズムが生まれました。

⁷ al-Nahda、19 世紀頃から展開された近代アラブの文芸・思想革新運動。

⁸ Abdulhamid Zahrawi, 1855–1916. 1913 年にパリで開かれたアラブ会議の提唱者で、1916 年にオスマン帝国によって絞首刑にされた。

⁹ Butrus al-Bustani, 1819-1883. レバノン、シューフ地区のディッビエ村生まれの作家。1863 年にすべての宗派に門戸を開いた国民学校の開設や文芸協会の設立、新聞発行を通じて、近代教育の普及とアラブ文芸の復興に貢献した。

¹⁰ Nasif al-Yaziji, 1800-1871. レバノン生まれの作家。1840 年にレバノン山からベイルートに移住してから、ブスターニーらとアラビア語の教科書編纂に携わる一方で、古典アラブ文学の復興を通じてアラブ民族主義に影響を与えた。

¹¹ 19 世紀以降の東アラブ地域におけるアラビア語文芸復興運動をもとにする、宗派を超えたアラブの統一、及びアラブ民族の政治的権力の復活を求める政治・社会思想。

シリアの場合は、イスラームではない人もいるから、その人たちもシリア人だから、私たちの兄弟だから、という考えです。けれども、その考え方が矛盾しているのは、シリアにはアラブ人ではない人たちも存在する、ということです。ですから、平等を訴えてはいるのですが、言語に基づいても宗教に基づいても、結局平等にはならないのです。本当の現代国家とは人権に基づく国家です。

7. イスラームのワタンからアラブのワタンへ

オスマン帝国の時代まではイスラームのワタンでしたが、19世紀にアラブの知識人がアラブ主義を唱え、1918年にアラブの軍事的な革命が起きて、2年間ぐらいですが、アラブの王国がつけられました。しかし、その後、フランス、イギリスが入って来て、植民地になってしまいました。アラブのウンマをつくることを望んでいたのに、全然違う結果ですよね。なので、オスマン帝国時代へのノスタルジアが今も存在しています。

その後、国の状況が悪くなればなるほど、ナショナリズムやアラブ主義はマイノリティやキリスト教徒の発想でしかないのです。私たちはもっと強いイスラームの国のままでいた方がよかったというイスラーム主義、イスラームの影響力を持っているシリア人の言い分が強くなりました。

植民地時代というのはもちろん最悪の結果なのですが、もう一つの悪い結果は、第二次世界大戦後、シリアが独立してからの軍事政権、これも最悪の結果です。結局、居心地のいい国はつくれず、自分の尊厳が守られる国ではありません。経済成長を果たす国でもありません。その点がとても重要です。私が思うには、人間はいろいろなイデオロギーや種族の話をしませんが、そしてもちろん文化は間違いなく大事なのですが、やはり経済成長がキーワードです。楽な生活さえできればどのワタンでもいい…とまでは言わないですけども、結局そういうものを実現してくれるワタンが欲しいというのが、人間にとって正直なところではないかと思えます。

8. アラブのワタンからシリアのワタンへ

次に、またこれもマイノリティが提案したアイデンティティなのですが、アラブのワタンを脱して、今度はシリアのワタンになりました。つまり、アイデンティティは、最初は広いイスラームでしたが、その後、アラブになり、そしてシリアになりました。必ずしも時間の流れに沿ったものではなく、時期でいうと話が前後するのですが、例えば、シリアのウンマ、シリアのワタンを唯一主張しているのは、シリア社会民族党という政党です。しかし、シリアといいながら、この政党はレバノン人のキリスト教徒がつくった政党で、今もメンバーのほとんどがキリスト教徒です。これは、アラブ世界の人口の偏りとともに生まれた考え方です。マイノリティであるクリスチャンや、スンナ派ではない人々は、そういうアラブ主義にしたら、もうマイノリティではなくなるからです。

だけど、アラブの世界になったとしても、圧倒的にイスラーム教徒の人口の方が多

くて、特にアラビア半島などの宗教的な動きやイデオロギー、ムスリム同胞団などが出てくるわけです。そうすると、ワタンをもっと小さくすれば、自分たちキリスト教徒やマイノリティの役割は大きいまま保たれる、という発想です。こうして少しずつ、イスラームからアラブへ、アラブからシリアへ、そしてさらにシリアからもっと小さく、サブシリアというか、サブローカルなアイデンティティが生まれました。

9. シリアのワタンから地方のワタンへ

イデオロギーの流れだけでなく、政治や歴史の流れもあります。たとえシリア全体的なワタンの考え方が弱いながらもあったとしても、シリアは本当に、具体的な出来事ではばらばらになった国なのです。イラクでは地域の意識は地理的には矛盾していません。エジプトも先ほど申し上げたように、比較的はっきりしています。植民地時代になっても、例えば国づくりに必要な神話ということになると、レバノン人は「私たちはフェニキア人です」と言えますし、イラク人は「私たちはバビロンの人です」と言えます。エジプト人は「私たちはもちろんファラオ [の末裔] です」と言えますが、シリア人は何と言えればいいか分からないのです。

なぜかという、フェニキアという流れはレバノンに奪われています。メソポタミアはちょっとしか入っていないので、メソポタミアも強く言えない。アラブと言ったらまた諸問題が出てきます。実際、20世紀に入ってから、サイクス・ピコ [協定]¹² などによって、植民地時代にシリアがどれだけちぎりとられたかということが分かります。

1920年にフランスがレバノンとシリアを委任統治することになり、フランスはキリスト教徒、特にマロン派に「あなたたちのために新しい国をつくる」と言って、歴史的にちょっと独特だったレバノン山脈地域にレバノンという国をつくりました。最初は本当にレバノン山脈の辺りだけでした。それはとてもはっきりとした差別的な国づくりで、本当にこの人々が住んでいる所だけで国をつくりたいということでした。それはそれで最悪なのですが、その次にフランスが考えたのは、これだけでは農業も何もできません。確かにレバノン山脈は——アミン・マアルーフさんの出身地でもありますが——独特の歴史を持っています。だから、マイノリティが存在していて、そのマイノリティはいつもマジョリティと複雑な関係があり、ヨーロッパなり、パチカンなり、フランスなりと、いろいろな特別な関係を持っていて、数百年にわたって特別な歴史が実際にありました。でも、それはレバノン山脈だけのことでした。

それに比べて北レバノンのトリポリという町はアラブ人がとても多く、宗教的にもスンナ派で、シリアの残りの地域との関係が非常に強いのです。シリアの海岸部で最大の都市ラタキヤは、歴史的にはトリポリ県の一部でした。とにかくレバノン山脈とはかけ離れた地域です。〔現在は〕ベカー高原がレバノンであることははっきりしているし、パールベックの遺跡はレバノン最大の遺跡ですが、これももともとはレバノン

¹² 1916年5月にイギリス、ロシア、フランス間で結ばれた、オスマン帝国領土の分割に関する秘密協定。

の一部ではありませんでした。フランスはレバノン建国を発表する直前に、レバノン山脈に、その周りの四つの地域をくっつけたのです。

したがってレバノンは非常に人工的につくられた国で、レバノン人から見るといろいろな矛盾があります。レバノンが建国されて最初の10年ぐらいの間、レバノンのイスラーム教徒はレバノン国歌が流れても起立しませんでした。納得していなかったのです。

これはレバノン人の話ですが、シリアの人はどう見ていたかという、地理的そして経済的に、ダマスカスの港はずっとベイルートでした。ところが急に、ベイルートに行けなくなって、港として使えなくなってしまいました。しかも、国のつくり方としては、アラブ・イスラーム文明と対立する、キリスト教徒を守るための国づくりという感じです。ですから、シリア人としては非常に損をしたように感じ、違和感を覚えています。

次は、パレスチナです。皆さんご存じのように、パレスチナも奪われました。地域としてのシリアはシャーム地方といって、シリアとヨルダンとパレスチナとレバノンで、ひとつのシリア地方 [シャーム地方] という意識です。でも、ダマスカスは突然、ベイルートの港を失いました。パレスチナも奪われました。

そしてもう一つ、フランスはトルコにイスカンダルーン¹³ という地域を割譲しました。アラビア語ではリワー・イスカンダルーン (イスカンダルーン県) というのですが、今はトルコの中のハタイ県となっています。イスカンダルーンは、シリア第2の都市アレッポの港ですから、第二の都市の港も失ったことになります。

現在、同じくトルコの中ハタイ県に位置するアンタキヤ¹⁴ は、精神的にダマスカスよりも大事なところ。アンタキヤはビザンツのルーツがあり、シリア独特のキリスト教の歴史の中で非常に重要です。ですから、トルコに割譲されたときにもいろいろなデモや対立はあったのですが、その後もずっと、今でも、ダマスカスの、例えばキリスト東方教会に行くと大司教がいるのですが、大司教の呼び方は、ダマスカスにいるのにアンティオキア [アンタキヤのラテン語名] のレバントの大司教というのです。

¹³ 東地中海沿岸、トルコ南部に位置する都市及び地域を指す。トルコ語読みではイスケンデルン (İskenderun) と称される。イスカンダルーン地域は第一次世界大戦後の1919年にフランス保護領になるが、1938年にハタイ共和国として独立したのち、1939年にハタイ県としてトルコに編入された。

¹⁴ アンタキヤの前身であるアンティオキアは、紀元前4世紀にセレウコス朝シリアの首都として建設され、セレウコス朝がローマに滅ばされた後も、ローマ、アレクサンドリアに次ぐローマ帝国第三の都市として栄え、16世紀にはオスマン帝国下でアレッポ州の一部となった。第一次世界大戦後は、イスカンダルーンと同じくフランス保護領になるが1939年にトルコに編入された。

でも、アンティオキアはもうシリアではありません。アンティオキアの教会はまだありますが、誰も行かない小さな教会になっていて、シリアのキリスト教徒にとって「精神的に」大事なところが奪われています。

ですから、シリア人からするとぼろぼろです。地域としてもぼろぼろです。こうやってアラブ世界をよく見ると、本当に歴史的シリア地方のあたりだけ、すごく細かく分けられている。サイクス・ピコ協定はイラクをつくりました。でも、シリアは、本来シリアとなるべき領土をむしりとられて、つくられた国なのです。地中海へ出るための自然な流れは分断されてしまったので、その後、ラタキヤという港をつくったのですが、本当に中途半端な感じです。

なので、シリアはそういう被害意識というか、「シリア人はシリアで納得しない」という言い方をしますが、それは単なるイデオロギーやアラブの統一という話ではなくて、シリアとして、ローカルな地域としてはもうぼろぼろで、だから、その点で満足はできないし、国の可能性を考えると、もうこれでは駄目というふうに考えているという事実があります。

10. シリアのワタンと領土

領土について、もうちょっとシリア独特の歴史の文脈でお話します。

まずはドルーズ¹⁵の話です。ドルーズはレバノン山中やシリアのゴラン高原南部、そしてパレスチナ北部にも存在するマイノリティです。

マイノリティにおけるシリアとワタンとの関係についてちょっと話すと、どれだけ厳しい歴史によって矛盾があったかが分かります。例えばシリアではフランス委任統治の時代、具体的に言うと1925年、大シリア革命¹⁶が起きました。フランスの支配に対する解放運動です。そのときは、それぞれの地域にリーダーがいて、シリア革命の最高指導者スルターン・バシャ・アトラシュ¹⁷は、シリアの少数派のドルーズの人でした。ドルーズは人口的にシリアの総人口の0.5%ぐらいなので、そのようなマイノリティがシリア全体の革命の指導者になるとするのは、本当に異常なことですよ。な



地図は Google map を基に事務局作成

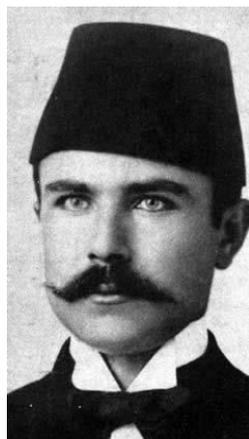
¹⁵ 11世紀、シーア派のイスマーイール派から分派した宗派。レバノン、シリア、パレスチナ北部を中心に、約100万人が中東地域に居住。

¹⁶ ドルーズ派武装勢力によるフランス軍機に対する発砲事件を契機に、ハマ、ホムス、ダマスカスにまで拡大した武装蜂起。反乱は1927年まで続くが、フランスによる徹底的な武力鎮圧により、革命は頓挫する。

¹⁷ Sultan Pasha al-Atrash, 1891-1982. シリア南部クライヤ生まれ。ドルーズ山にてフランスに対する反乱を率いる。

ぜ、この人が最高指導者になったかという点、宗教ではなくてアラブ主義に基づいた国づくりを目指していたからで、あえてメインストリームのスンナ派ではない人を選んで最高指導者にしたのです。1925年のシリアでは、この人が一番有名なシリア人の政治家で、シリアが独立してから10年くらいの間もそうでした。

これは、ファーリス・アル＝フリー¹⁸ というキリスト教徒です。シリア最初の首相で、1940年に国連がつくられたとき、シリアは創設メンバーのひとつなのですが、そのとき彼がシリア代表として国連に行きました。独立当初はシリアで一番有名なリーダーでした。



Wikimedia - Faris al-Khoury
(Public Domain)

アル＝フリーについて有名な、笑えるエピソードがあります。国連がつくられるということで国連に行ったとき、彼はフランス代表の椅子に座りました。フランスの代表者が来て、「すみません、そこは私の椅子なんですけど」と言ったのですが、彼は無視してそのまま座り続けました。フランス代表はすごく怒って、「誰か何とかかしてください。この人が私の椅子に座っています」と言いました。すると彼は立ちあがって、「おまえはたかが10分間で怒っているけど、おまえらは私の国に25年間もいたんだぞ」という冗談を飛ばして、それが有名な話になりました。

彼はシリアのヒーローで、しかも、ここが大事なのですが、先ほど写真をお見せしたキリスト教徒のリーダーたちは、アラブのメインストリームのキリスト教会の人々なのですが、ファーリス・アル＝フリーはプロテスタントなのです。日本人から見ると普通にキリスト教徒ですが、シリアにはプロテスタントが本当にいないのです。日本や韓国など北東アジアには、プロテスタントはよくいます。でも、シリアは今でも、プロテスタントは本当に探さなければ見つからないくらい——数百人ではないかと思うくらい——、わずかしきいません。それくらい極端なマイノリティの人がシリアの代表になったということが、「私たちはイスラームではなくてアラブ人です」ということを表しています。

それで、ドルーズの話に戻りますが、シリアの最高指導者がドルーズだったように、それくらいドルーズはシリアの大切な一部、アラブ主義の大切な一部です。イスラエルがつくられて、シリアのゴラン高原が今はイスラエルに占領されています¹⁹、ゴラン高原のドルーズはイスラエルにとっても強い帰属意識をもっています。イスラエル軍では、アラブの地域を攻撃するイスラエル兵の中で一番強いのがドルーズ部隊と言われています。アラブ人なのに激しくアラブを攻撃します。なぜ、こうしたギャップがあるのでしょうか。

¹⁸ Faris al-Khoury, 1877-1962. シリアの政治家。レバノン南部ハスバイヤ地区のクフェイル村で生まれる。1944年から1945年にかけてシリア第19代首相を務める。

¹⁹ ゴラン高原はシリア南西部、レバノン、ヨルダンの国境地帯に広がる高地である。1967年の第三次中東戦争の際にイスラエルに占領された。70年代以降はユダヤ人入植地建設がすすめられる。イスラエル議会は1981年にゴラン併合法を可決し、実効支配を固定化していくが、シリア及び国連安保理はこれを認めておらず、同地がシリア領であると主張している。

さらに言うと、1970年代のレバノンにおいて、レバノンはマロン派のための国ではなくアラブの国だ、と一番に訴えたのもやはりドルーズの人でした。ヤーセル・アラファート²⁰ と同盟関係をつくって、レバノンのマロン派体制を倒せそうになったのはカマル・ジュンブラート²¹ というドルーズの人です。ジュンブラートは暗殺され、彼の運動は結局失敗してしまいましたが、アラブ主義者や社会主義者のあいだでは神様のような存在です。

レバノンの中でもドルーズはマイノリティですが、カマル・ジュンブラートは先ほどのシリア革命と似たような流れで、進歩社会党²² のトップでした。であれば、なぜイスラエルではドルーズがアラブを攻撃するのか、ということになります。非常に矛盾していますよね。同じドルーズなのに、英雄なのか裏切り者なのか分かりません。

これはどのように説明ができるかという点、ドルーズという宗派の中では、自分たちが今いる場所が非常に大事です。宗教的に、土地との関係が特別なのです。自分からはワタンを絶対に離れません。だから、1967年の戦争でイスラエルがゴラン高原を奪ったとき、みんな難民としてシリアに入ってゴラン高原を解放しよう、という話がいっぱいあったのですが、ドルーズの人たちだけは絶対にゴランを去らずに故郷に残りました。ゴラン高原に残ったドルーズは、サバイバルのためにイスラエルに従ったのかどうかは分かりませんが、間違いなくワタンとの関係は複雑になってしまいました²³。

アルメニア人の話も少しだけします。アルメニア人はトルコに虐殺されて²⁴、たくさんアルメニア人が難民となってシリアにやって来ました。1915年のことですが、実はその前からたくさんアルメニア人がシリアに流れてきていました。例えばエルサレムの旧市街にはアルメニア人地区がありますし、アレッポにもアルメニア人の地区があったのです。シリアはアルメニア人を歓迎しましたが、アルメニア人はシリアに対して、自分たちはシリアをワタンとは思っていない、という感じをずっと明らかにしています。

アルメニア人はアルメニア人の学校を持っていて、いつもそこで勉強し、アルメニ

²⁰ Yaser Arafat, 1929-2004. パレスチナの革命家、政治家。パレスチナ国初代大統領。パレスチナ解放機構（PLO）執行委員会議長。パレスチナ解放のため対イスラエル武装闘争を指揮してきたが、のちに対話路線に転じ、イスラエルとの和平プロセスを進めた。

²¹ Kamal Jumblatt, 1917-1977. レバノンの政治家。レバノン山脈中部シューフ地方のムフターラという町で生まれる。進歩社会党の創始者。レバノン内戦（1975-1990）では、マロン派に偏重する政治権力に対抗して左派連合体「レバノン国民運動」を結成し、アラブ民族主義政権の樹立を目指した。

²² カマル・ジュンブラートが創始したレバノンの政党。思想として政教分離の世俗主義を掲げる。現在の党首はカマルの息子のワリード・ジュンブラート。

²³ イスラエルはその後、ゴラン高原を併合、住民にイスラエルの市民権を付与するが、住民の中には、イスラエル市民になることは併合を是認することになるとして、これを拒否する者たちもいる。

²⁴ 第一次世界大戦中、青年トルコ党政権下のオスマン帝国で帝国領内のアルメニア人の一掃を目的として強制移住及び集団虐殺が行われた。

ア語を必ず書けて、アルメニア語でしゃべっていて、シリアには他にもたくさんのキリスト教徒がいるのに、アルメニア人は絶対というぐらい、アルメニア人ではない民族の人とは結婚しません。結婚する人がいたとしても、非常に少ないです。自分の宗教と言語をそのまま保っていて、何か臨時に住んでいるような感じですか。あまり溶け込めていません。と同時に、周りとはすごく友好的な関係を持っています。私の世代までは、ちょっと変わった手仕事、例えばカメラマンとか、初めてフランスパンを作ったとか、そういう欧米の文化や機械の仕事など、今もアレッポで一番有名な車のガレージを作ったり、車を直したりしているのはアルメニア人です。

ですから、アルメニア人のイメージはとてもいいです。もちろんシリア人として認められているし、国会議員になった人もいるし、軍の司令官もいるのですが、アルメニア人は、やはりアルメニア人のあいだでは、祖国はシリアではなくアルメニアであり、追放された地域にある、という意識が高いままです。シリア人にとってのワタンという問題を考える場合、その人にとってワタンと領土/土地のどちらが大事なのかという質問を、シリアの文脈では、それぞれの人に聞かないといけなと思います。

それから、もちろん皆さんが知っているクルド人の話です。クルド人は、国のない民族と言われていますが、歴史的な地域はイランの北部、シリアの東北部、あとはイラクとイランですね。クルド人はシリアの中でずっといじめられて、アラブ主義にしても、またトルコにおいても、いつも抑圧されて、山に住んでいるマイノリティというイメージですが、近年、シリアにおいても歴史上初めて、自分の地域以外で、自分たちの本来の地域よりも広い地域を支配することができました²⁵。なぜかという、シリアの困難の中でクルド人としてはちゃんとしたリーダーシップがあって、軍事的な動きとしてはアメリカやロシアなどと同盟関係をつくることができたからです。クルドの話は後ほど、もうちょっとします。

もう一つ、歴史の話としては、産油国であるペルシャ湾岸諸国はお金はありますが、歴史が浅いので、シリア人は自分たちの文化をすごく誇りに思っていて、最近まではドバイなど大したものではない、ダマスカスの方が百倍いい、という人がたくさんいました。しかし、ワタンのプライドも揺れる時代になりました。フェイスブックを見ていると、シリア人が「シリア7000年の歴史」などと言うのですが、それに対して、「7000年の歴史は役に立たなかったではないか。ドバイの30年の歴史の方がいい」と嫌味を言うシリア人がいます。シリアの歴史は絶対にいいものだと思ったけど、今のシリア人にとってはもしかすると、ワタンの歴史はお荷物なのではないか、と思う人も出てきたと思います。

²⁵ シリアのクルド人は従来、シリア北部、トルコ国境沿いの、コバニ、ジャジーラ、アフリーンという3つの飛び地（カントン）から成るロジャヴァと呼ばれる地域に居住していたが、内戦の過程でクルド人民防衛隊が、北部を占領したISや政府軍を撃退したことにより、シリア北東部一帯を掌握した（3頁の地図の黄色部分）。

11. シリア権力者と偽善

シリアは独立してから10年くらい、民主主義の時期²⁶がありました。しかし、その後は軍事政権が次々と誕生しました。最初の軍事政権は、フスニー・ザイーム政権で、アメリカ大使が「クーデターをしてもいいよ」と言って誕生²⁷しました。それに対し、アメリカ等々と仲良くするのはいけないという者もいたり、パレスチナ問題も起きて、1940年代の戦争（第1次中東戦争）²⁸が起きてみんなパレスチナ解放のためにということで、何よりも軍が政権を握り、パレスチナのために戦うという名目で軍の司令官たちがバアス党の名前を使って政権を握って、結局はバアス党の設立者ミシェル・アフラクをシリアから追放しました。アフラクはイラクに逃げて、イラクでも政権を握ることなく、サッダーム・フセインに利用されただけでした。

最終的に軍事政権がシリアの政権を握り、それ以降は言うこととやることが正反対になっています。バアス党のスローガンは統一自由社会主義なのですが、アラブ世界をばらばらにして、隣のイラクもバアス党なのに統一せず、逆に喧嘩ばかりしていて、自由といいながらシリア人を抑圧し、そして社会主義といいながら、世界の長者番付のリストに入っているのです²⁹。

それでもワタンの話になると、一般的にシリアの知識人も、社会主義やアラブ主義というような考えを信じていました。けれども、1960年代以降、特に1977年にハーフィズ・アサドが大統領になってからは、大きな分裂が起きました。本物の左派と自覚している知識人と、この偽善の政権の間に大きなギャップができ、対立が起きました。それで、シリア政権はたくさんの左派知識人を拘束して殺したりしました。

そこで、偽善とアイデンティティの混乱の話になりますが、[次頁]左はシリア政府が発行している観光ガイドで、シリアの位置を見せるマップです。何かおかしくないですか。

私なら右のようなマップにするのですが、どう違いますか。シリアの位置を見ている地図なのに、シリアがど真ん中ではないです。ヨーロッパを無理に見せたいのです。アラブ主義といいながら、なぜアラブを見せていないのでしょうか。すぐ南にあるアラビア半島を見せていません。自分のルーツがある場所を見せずに、ヨーロッパを見せています。とても矛盾していますね。

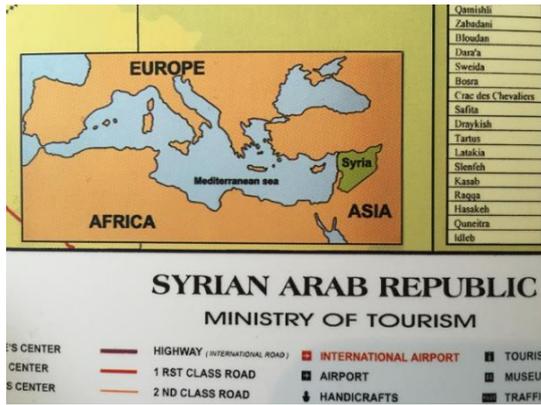
それなのにシリアの今の紛争において、EUがシリアを制裁したときに、3週間ぐらい前に亡くなられた、ワリード・ムアッリム外務大臣が記者会見で、「ヨーロッパが私

²⁶ 1946年の独立から1963年にバアス党が政権を握るまでの間は議会制民主主義体制が敷かれた。

²⁷ 1949年3月30日、ザイームはクーデターで権力を握った。米国中央情報局（CIA）がクーデターを仕組んだという疑惑があり、それについては議論が分かれるが、ザイームは作戦を計画するにあたりアメリカの援助を受けていたとされる。

²⁸ イスラエルの独立宣言を契機に1948年から49年まで戦われた、アラブ側（エジプト、シリア、レバノン、トランスヨルダン）とイスラエル間の戦争。

²⁹ <https://www.theguardian.com/world/2012/jul/19/bashar-al-assad-950m-fortune>



Wikimedia – Outline map of Middle East (CC BY-SA 2.0) を基に作成

たちのことを気に入らないのだったら、私たちはヨーロッパを世界の地図から消します」とすごく威張った言い方をしました。ヨーロッパを消すのなら、こんな地図を作るな、という話ですね。ヨーロッパにくっつきたいけど、ヨーロッパが嫌い。けれども、私たちは現代的な国、ヨーロッパに生まれた社会主義、ヨーロッパに生まれた現代国家づくり、ナショナリズムをやっているといいながら、結局はヨーロッパ的な現代化も果たせていないし、アラブのルーツも守っていないという、中途半端としか言えない状況です。

特に政府側の方は、例えば反体制側の方のことを、サウジアラビアやカタールからお金が入っているかもしれないということで、「おまえらは裏切り者だ」と言います。「裏切り者」とか「嘘つき」とか、子どもが言うような言葉で「アラブ=悪いこと」と言っています。それはつまり、私たち[シリア人]は違うけれども、アラビア半島の石油の国々はアメリカ帝国主義に従っているから裏切り者だと言って、結果として、アラブを否定しているわけです。

12. ワタンを滅ぼす指導者

最後に、ワタンを滅ぼす指導者の話です。今日、一番大事な話です。「国内植民地主義」という発想は、1970年代のラテンアメリカの軍事政権に関して生まれたアカデミックな発想です。南米では、例えばチリとアルゼンチンで独裁政権がありました。でも、武力の加減が一線を超えると、本当にこの国の政府でいいのか、この国の人でいいのか、ワタンの一部と認めていいのか、これは植民地に等しいのではないかという疑問が出てきました。

例えば、シリアでは樽型爆弾³⁰ などという残酷な話があるのですが、南米にも独特な話がありました。反体制の知識人を捕まえると、飛行機に乗せて、飛行機から生きのまま突き落とすのです。これは恐怖政治ですね。人を殺すなら撃てばいいわけですが、恐怖政治をするために殺害するのです。捕まった女性活動家の性器の中に生きているネズミを入れるようなこともしていました。そうなるともう、国の独裁が激しいというような形を超えて、国内植民地ではないか。要するに、国民と政権の関係につ

³⁰ ドラム缶など円筒形の容器に大量の爆薬と金属片を詰め込んだ無誘導爆弾。

いて違う呼び方をしなければいけません。その呼び方は、まさにシリアの場合にも使えるのではないかと思います。

シリアで行われている拷問のレベルと規模は、ホロコーストに次ぐものです。数十万人は間違いなく殺されていて、もしかすると 50 万人とか 100 万人に近いという人もいます。難民の人数も分からないし、国が混乱しているので正確な数は分かりません。証拠はないですが、国内外の難民の中で 100 万人が拷問で殺された可能性もあり得ます。

シリア政権が北朝鮮に学んだことは、ワタンを「牧場」にすることです。今のシリアでは、「私たちの国はアサドの牧場である」という言葉が口癖のようになってしまいました。「共和国」といいながら、大統領が亡くなったら息子が大統領になって、今度は孫が大統領になることもあり得るかもしれません。ですから、国が暴力を独占する。過剰な暴力になると、そういうことを考えなければいけません。

一例として、ハーフィズ・アサドの長男であるバースイル・アサドは、大統領になるはずでしたが、交通事故で亡くなったため次男のバッシュアールが大統領になりました。長男が死んだのは 1994 年ですが、彼は 1993 年に、自分の伝説づくりとして、馬の指揮がすごくうまいというイメージをつくろうとしました。この人は何でもできるというイメージです。北朝鮮と全く同じですね。金正恩は 7 歳のときから、銃を撃ったら完璧に的に当てるとか、そういうスーパーマンのような話を聞きますよね。ちょっと似たような感じで、バースイル・アサドの伝説をつくっていたとき、馬術競技でアドナーン・カサルという人が間違えて勝ってしまったのです。本当はバースイルが勝つはずだったのですが、この人は巧かったから勝ってしまいました。その結果、カサルは刑務所に 23 年間入れられました。最近ぼろぼろな感じで出てきました。昨今のニュースで拷問などの話はよく分かると思いますし、見せる必要がないと思いますが、この事件でどういう考え方を持っているのか。目の前にいるのは人間ではないというふうに考えられていることが分かります。

13. 見えなくなったシリア人

最後に、「見えなくなったシリア人」について。

今、香港で起きていることについて、映画³¹も作られています。ウイグル問題についてもいろいろな映画や記事があります。チベットを応援するハリウッドのスターもいます。今はモンゴルも問題になっています。しかし、普通の台湾人でもなく、モンゴル人でもなく、チベットの人でもない普通の中国人のことを私たちはあまり気にしていないのではないのでしょうか。

中国のワタンのつくり方のことや中国の問題を考えるときに、問題とされるのは必ず香港とか何とかになるのです。普通に中国のど真ん中にいる人が毛沢東時代から大変な目に遭って、その後どうなったのか。今はお金持ちになっていますが、ではみんな [中国政府に] 賛成しているのでしょうか、みんな敵なののでしょうか。「敵は漢民族

³¹ 堀井威久磨監督『香港画』、2020 年。

ですか」という質問をする必要があります。最初から私が言っているのはマイノリティが歴史をリードする是非なのですが、マイノリティ側の歴史をつくり過ぎという場合もあるのです。今のシリアの問題は、シリアで生きている普通のアラブ人のスンナ派のシリア人、一番多いシリア人のことを誰も気にしていないのです。

だから、シリアについての話の中では、権力を取っているアラウィー派やクルド勢力の話が多くなり過ぎます。例えば、シリアのことを取材していた私の仲間で、鈴木雄介さん³²は、シリア革命が起きてからアレッポに入って素晴らしい写真を撮りました。しかし、現状では入れません。ですが、クルド地域には入れます。安田菜津紀さんもクルド地域に入ります。結局、みんなクルド地域に入って、クルドのことばかり撮るのです。

クルドでは、実はアラブ人に対して非常に深刻な人権侵害が起きています。クルド人は最初は被害者だったのですが、最近は加害者になっています。もちろん ISIS に殺害されたたくさんのクルド人もいるのですが、ISIS に殺害されたアラブ人の話よりも、ISIS に殺害されたクルド人やヤズイーディー³³の方がメディアに愛され過ぎて、クルドやヤズイーディーの話ばかりするのです。

ここではっきりさせたいのは、ヤズイーディーは本当に深刻な被害に遭ったし、とても小さなマイノリティで、絶滅するのではないかという心配もありました。だから、ヤズイーディーのストーリーも語らなければいけないし、クルドのストーリーも語らなければいけないのですが、普通の、マイノリティではないシリア人の話はどこに行ってしまったのでしょうか。

鈴木雄介さんの最近の作品を見ると、とても素敵なのですが、完全にクルドのナラティブに従っています。安田さんはこの間のトークで、シリアのデリゾールという大きなアラブの町に入った話をしていましたが、「誰と入ったのですか」と聞いたら、クルド勢力と言っていました。「インタビューしたときに、あなたのガイドはアラブ人だったのですか」と聞いたら、「いや、クルド人だった」と。「そこに問題はないのですか」と言ったら、彼女は、「私は誰でも人権を侵害したら反対するし、悪いことは必ずクルド側からも批判します」とありがたい言葉を言ってくれました。しかし、彼女の作品を見ると、クルドの女性が銃を持っていたりします。

私も、クルドは本当に大変な目にずっと遭っていたのだと思っていますし、クルド民族として人権を守らなければいけないと絶対に思いますが、被害者だった人のプロパガンダに乗ると、結局、そうやってイスラエルが作られたのです。女性が銃を持っているからといって、クルド社会が急にスウェーデン社会になったわけではありません。1970年代のパレスチナ革命では、たくさんの女性が銃を持っていて、レバノンの難民キャンプでは、たくさんの外国人ジャーナリストを歓迎していました。ジャーナ

³² 鈴木雄介 (1984-)。ニューヨークを拠点に活動するドキュメンタリーフォトグラファー。アメリカを中心に世界各地で個展を開催。2016年、個展『シリア・失われた故郷』開催(京都)。

³³ イラク北西部を中心に信仰されている民俗宗教、及び信徒。一神教であるが、特徴としてゾロアスター教、マニ教、キリスト教、イスラーム教などの要素が混淆する。

リストから見ると、それは「おいしい」話なのです。すぐにインタビューできて、すぐにかっこいい写真が撮れて、みんなが思っているステレオタイプとは違う写真がたった2日間で撮れるからです。そういうこともあって、典型的なシリア人の声がかき消されています。

もう一つは、セントラル・コマンド [中央司令部] の話です。国際政治の話になるのですが、オバマ政権はイランと結構うまくやっていました。今またバイデン政権になるから、もしかするとイランとうまくやるかもしれません。では、イランとはうまくやっていて、サウジアラビアはずっと盟国なのに、なぜ、サウジアラビアとのテンションが高いのか。それは、セントラル・コマンドがあるかどうかなのです。要するに、シーア派にはセントラル・コマンドがあって、イランが決めたことのほとんどに全世界のシーア派は従います。

だけど、サウジアラビアはワッハービズム³⁴ といいながら、ワッハービズムの解釈にとっても近い ISIS がシリアのダッカを支配したときに、サウジアラビアの言うことをきいていましたか。反対に ISIS は、サウジアラビアの国王が亡くなったときに、独裁者が死んだと言ってお祝いしたのです。サウジアラビアは本当のイスラーム政権ではなく、偽善のようなことを言っているからです。アメリカはそういうものを見ていると、では誰と話せばいいのかという話になるから、アラブのスナ派のセントラル・コマンドなら確かにアクセントがないということで、現実しか見ない政治から見たら、典型的なアラブ人の話し合い相手は見つかりにくいのです。

メディアは、もっといろいろな側面を見せたい。しかし、人間的な側面を見せたいメディアは、今は反体制のところにも入れないし、政権のところに入ったらいろいろな問題があるから、クルド地域に行くわけです。結局、普通のシリア人が見えなくなっているということが、シリアのワタンの今の問題です。

ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

岡 ナジーブさん、ありがとうございました。人間とワタンの関係性を考えるという営みは、その土地の歴史、そして、そこに生きる人々の歴史と深く関わっていて、それゆえに実に複雑なことである、ということがよくお分かりいただけるお話だったと思います。

特に、人間とワタン/Homeland の関係性をシリアから考えるとき、シリアは 2011 年から 10 年近く戦争状態にあり、総人口の半数が国内外で難民となり、「郷里」という意味でも「祖国」という意味でも Homeland を去らざるを得ない、あるいは Homeland それ自体が内戦で破壊されている、そういう人々が大勢いる。でも、そこに生きてい

³⁴ 創始者はムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブ。18 世紀にアラビア半島で起こった、クルアーンと預言者ムハンマドのスナへの回帰を唱えるイスラーム改革運動に端を発する。ワッハーブ派はイスラーム法学派のうち厳格なことで知られるハンバル派に属し、現在サウジアラビアの国教である。

る人たちは、一枚岩的な「シリア人」ではなく、たいへん多層的なアイデンティティを持っている人々だという、非常に専門的で深いお話をさせていただきました。

私からまず、質問させていただきたいのですが、今、マイノリティばかりが注目されて、シリアのマジョリティであるスンナ派のシリア人が無視されていて、まったく伝えられていないということでした。では、もしナジーブさんが今、シリアに入られるとしたら——実際には政治的な意味でも、ほかのいろいろな意味でも取材はできないのですが——、仮にそれができたとしたら、メディアでは伝えられていないシリアのマジョリティに関して、ナジーブさんは何を伝えますか。

ナジーブ 本当にありがたい質問です。紹介したい書籍があるのです。私の友達のヤーセル・ムニーフさんが書いた *The Syrian Revolution: Between the Politics of Life and the Geopolitics of Death* (シリア革命 生の政治と死の地政学のはざま) ³⁵ です。“Politics of Life”とは、生きるための政治です。この本には、それぞれの小さな町で、例えば、今回の話で言えばごみ収集から医療、教育にいたるまで提供しているローカルなコミュニティの人々のことが書かれています。世界が地政学なことばかり見ている、結局、ミクロなところを全然見えていない、あるいは見たとしても、マイノリティのミクロしか見えていないことについて書いてある、とても重要な本です。私はそうした人々の仕事と様子をぜひ世界に見せたいと思っています。

岡 サマル・ヤズベクさん³⁶ の『無の国の門』³⁷ も、シリア内戦の初期に解放区に入って、そこで人々が、空爆にさらされながら、どのような市民活動をおこなっているかを描いた作品でしたね。

ナジーブ そうですね。現在では、サマル・ヤズベクのような人でも、シリアに入れないのが事実です。情報へのアクセスができないという点では、これはすごく大きいですね。

それから、世界のメディアは、実は、これらの人々を利用しているのです。例えば先日、横田めぐみさんの絵を描いた人やそのカメラマンの話を知ると、彼らは非常に危険な地域で、いろいろなトレーニングを受けて自分の生活を手に入れて、比較的きれいに撮れる撮影機材や最近では小さなドローンも持っていて、すごくいい仕事をしているのですが、海外のメディアは彼らの仕事に興味がありません。大きな爆弾が落ちたり、大きな悲劇が起きたときには興味をもちますが、そのときも、彼らの撮った写真を利用して、使用料を払わないのです。例えばAFPやロイターが配信して、世界にこの写真を見せてあげるから頂戴みたいな感じで、彼らが撮った写真を無料で利用するので、彼らは結局貧しいままなのです。

³⁵ Yasser Munif, “The Syrian Revolution: Between the Politics of Life and the Geopolitics of Death”, Pluto Press, London, 2020.

³⁶ Samar Yazbek (1970-). シリア北部ジャブラ生まれの作家、ジャーナリスト、シナリオライター。現在はパリ在住。

³⁷ サマル・ヤズベク、『無の国の門』、柳谷あゆみ訳、白水社、2020年。

横田さんの絵のときには、私が日本のメディアに「この写真はカメラマンが撮ったものですから、撮影した人にお金を払いませんか」と言って、払ってくれたところと払わなかったところがあるのですが、カメラマンは「え、お金をもらっているの？」と驚いていました。日本のメディアはシリアに人をまず送れないし、送れたとしても日本からの飛行機代も高いし、危険地域には絶対に入れないから、そこで撮影された写真はすごく貴重なものなのに、向こうは「お金もらっているの？」みたいな感じなのです。

先日も横田めぐみさんのことを描いて、その前にジョージ・フロイドさんのことも描いて、最近ではマラドーナのことまで描いて、そういう活動を通して、私たちは存在しているよ、生きていよ、と言っているわけです。サマル・ヤズベクが言うように、「私たちの作品は作品として見られていない」というのと同じ話をよく聞きます。シリア人の存在が、市民から知識人にいたるまで、認められていないのです。岡崎弘樹さんが翻訳したヤシーン・ハージュ・サーレハの本³⁸の中の最近有名な言葉として、欧米やイスラエルによる記憶の支配の中でシリアが「忘却の地」となっていると言っているのです。

参加者 ドルーズの人たちがシリアのゴラン高原とパレスチナ北部にマイノリティとしていて、ゴラン高原のドルーズはイスラエル軍に入って攻撃をしているという話がありました。パレスチナ北部にもドルーズの人たちがいるということは、パレスチナとイスラエルの対立を考えたときに、ドルーズの中でも分断が起きていているということなのでしょうか。

ナジーブ とてもいい質問をありがとうございます。例えば、難民にならずにゴラン高原に残ったドルーズの人たちは、同じ村の中でも、それから近隣の村のあいだでも、人によって態度が完全に違ったりします。例えば、イスラエルを完全に受け入れて、イスラエルのIDをもらい、軍に入り、司令官になるドルーズがいる一方、そのいとは、イスラエルが1980年代に「ゴラン高原はイスラエルの一部であり、占領地域ではない」と決めてIDを配ったときに、「私たちはシリア人だ」と言って、イスラエルIDを集めて広場で燃やした、そういうドルーズの人もいます。自分を「イスラエル人です」と言う人と「シリア人です」と言う人がいるのです。

「シリア人です」と言った人たちの中でも、激しい対立が生まれました。「アラブの春」のときです。本当に情熱的なアサド側の人と、「アラブの春」を支持して、アサドのような政権がある限りゴランもパレスチナも解放されないという人がいるのです。

先日、このようなことがありました。ゴランのドルーズの人で、長くイスラエルの刑務所に入っていた、反イスラエルの活動家が釈放されました。彼は病室で、アサドの写真を持って「私はシリア人だ、アサドが私のリーダーだ」と言いました。それに対してシリアの活動家たちが嫌味で、「あなたはイスラエルの刑務所から出てきた。あ

³⁸ ヤシーン・ハージュ・サーレハ、『シリア獄中獄外』、岡崎弘樹訳、みすず書房、2020年、第10章「忘却の地、シリア」(pp.202-211)を参照。

あなたはイスラエルの刑務所で病院に入れる。あなたはラッキーだ。アサド政権の刑務所に入ったら、もう行方不明だ。病気になっても死ぬまで拷問されるから。ばかやろう」というコメントがソーシャルメディアに流れていました。それくらい、本当に激しく分裂しているのです。

岡 クルディスタンがトルコ、イラク、イラン、シリアに分断されていることはよく語られますが、ドルーズもそうなのですね。まさに分割して統治されることでばらばらにされているのですね。

エラン・リクリス³⁹ というイスラエルのユダヤ人の監督が、ゴラン高原のドルーズの村を舞台に「シリアの花嫁 (Syrian Bride)」⁴⁰ という映画を撮っています。この作品では、イスラエルに併合され、イスラエルの市民権を付与されることになっても、それを拒絶して闘っているドルーズのコミュニティが描かれています。シリア側にいる従兄と結婚する花嫁が主人公で、ゴラン高原を出てシリア側に入ると、もう二度と故郷の村/Homeland に帰って来られないという花嫁を描いた作品です。

それから、先ほど名前が出たサマル・ヤズベクさんというシリアの女性作家の『無の国の門』の日本語訳が、今年刊行されました。ヤズベクさんは内戦でいったんはシリアを出ているのですが、その後トルコ側から3回にわたって潜入して、反体制側の支配下にある解放区——「解放区」という名前とは裏腹に、反体制が支配する地域です——に入ると、先ほどナジーブさんが触れられた、市民たちが解放区でどのように闘っているのか、単に「戦闘」という意味での闘いだけでなく、市民社会を実現しようとして、爆撃にさらされながら、どのような市民活動をおこなっているのか、ということ『無の国の門』に記録しています。

ナジーブさんが引用された、ヤーシーン・サーレハの、『シリア獄中獄外』については、翻訳された岡崎先生から、のちほど直接紹介させていただきます。

ナジーブ シリアの現在の話は聞いていただいたとおり、非常に暗いのですが、最後にちょっとだけ「希望」について話をします。先ほど言ったように、シリア人は本当に厳しい状況の中ですごい実績を積み重ねていて、それ自体は暗い話ではありません。それだけできているということを私はすごく誇りに思っています。長い間、とても厳しい状況の中で生きているコミュニティです。世界はそこから、多くのことを学べるはずですよ。

例えば100年以上前に起きたパリ・コミューンについて、いまだに語られます。1870年にパリで労働者たちが自分のコミュニティを作って反発したという話は、130年に

³⁹ Eran Riklis (1954-)、イェルサレム生まれのイスラエル人映画監督。代表作に“Lemon Tree” (2008)、“Human Resources Manager” (2010、第83回アカデミー国際長編映画賞イスラエル代表作品に選出)ほか多数。

⁴⁰ Eran Riklis, “The Syrian Bride”(2004, Israel). 第28回モントリオール世界映画祭最優秀作品賞受賞作品。

わたって世界にたくさんのインスピレーションを与えています。シリアからも、パリ・コミュンと同じように多くの教訓を学べるのに、誰もそれを見ていないのはもったいないですね。

シリア人は、破壊の中でもアートを生み出しています。破壊された壁でアートを作っているのです。だから、シリアの歴史の中では今が一番創造的な時代です。国の内外で非常に面白いアートがどんどん生まれています。その中で、私の知り合いのシリア人で、アレッポ出身で今はカナダに移民している人が作ったアニメがあります⁴¹。アレッポについてなのですが、カナダのケベックで製作しているので言語はフランス語ですが、いずれアラビア語にもなります。ぜひいつか日本語にもなってほしいですね。

ドゥンヤという名の女の子の話ですが、「ドゥンヤ」とは、アラビア語で「世界」という意味です。結局は戦争になってアレッポから出ていくという話なのですが、アニメとして本当に楽しめる作品です。シリアの難民がヨーロッパに危ない小舟で渡る場面などもあります。

岡 この状況であるからこそ逆に、創造性が発揮されて、そうしたアート作品がたくさん生み出されていることが、ある種希望であり喜びであり、でもまた、何か悲しくもありますね。

せっかくナジーブさんが明るいポジティブな「希望」のお話をしてくださったのに、私がそれをまたネガティブの方に引き戻して申し訳ないのですが、先ほどのパリ・コミュンの話から思い出したことがあります。何年か前に、ジョゼフ・マサド⁴² というパレスチナ人研究者が書いたエッセイをゼミのテキスト⁴³にしました。ナクバ⁴⁴ から70年がたった現在の、世界のパレスチナ連帯運動についての、パレスチナ人知識人による批判的な考察です。例えばスペイン内戦のときは、世界の若者たちが義勇兵としてスペインに駆け付けました。1970年代、武装解放闘争の是非はさておき、パレスチナ解放の戦列にいたのはパレスチナ人だけではありませんでした。

今はどうでしょうか。占領下にやって来て、視察して、国に帰って、やることといえばせいぜいその報告会を開いて、いくつか報告記事を書くだけの「連帯ツアー」に過ぎないとマサールハは批判しています。それは本当に私の心に突き刺さりました。これまで、私がやってきたのは、まさに、そういうことだったからです。数十年前は「連帯して」、命を賭して、文字どおり闘っていたのが、今は単なる「ツアー」、それが「連帯する」ということと取り違えられてしまっている。

⁴¹ 「ドゥンヤ」監督インタビュー：TV5MONDE Info (2021) Syrie / Canada Marya Zarif créatrice de la websérie Dounia, <https://www.youtube.com/watch?v=6Co24psted8>

⁴² Joseph Massad (1963-), ヨルダン生まれのパレスチナ人政治学者。コロンビア大学教授。。

⁴³ Joseph Massad, "Palestinians and the dilemmas of solidarity," *The Electronic Intifada*, 14 May 2015.

<https://electronicintifada.net/content/palestinians-and-dilemmas-solidarity/14518>

⁴⁴ ナクバはアラビア語で「災厄」、「大惨事」を意味する。1948年5月のイスラエル建国に伴い、パレスチナの地に住んでいた70万人以上のアラブ人が難民となった。

先ほどナジーブさんが紹介してくださった地図の中の灰色の地域は、グローバルな近現代史の中に位置づけられる、思想的にもすごいことが起きている。これが50年前だったら、危険を顧みずに世界中からそこに駆けつけている人たちがいて、世界がそれを注視している。今そこで何が起きているのか、そこで今日は爆撃が起きて何人が死んだのかというのを固唾を飲んで毎日見守っている、そのようなトポスが、2020年の今は、存在しているにもかかわらず、世界の認識のなかでは存在していない。そういう時代に私たちは生きている。パレスチナに関してマサールハが言っていたことを、あらためて思い出しました。

では最後に、アラブの近現代思想がご専門で、シリアにも長く暮らしておられた岡崎弘樹さんに、全体の話が聞かれた上でコメントを頂戴したいと思います。

岡崎 本日はどうもありがとうございました。アラブから日本にいらっしゃる方というのは、歴史的にも多くて、留学生も多々いるのですが、多くの方が理系であったり、もしくはそれぞれの言語の専門ということで、欧米には言論界に関わるアラブ出身の方がたくさんいらっしゃるのですが、日本ではほとんどいません。やはりナジーブさんはそこが圧倒的に際立っている方だと私は思います。

これはなぜかという、実はシリア人は歴史的にそうで、先ほど言ったマイノリティ問題もあって、特にエリートの中で多言語に、そして国際的な文化に精通している方がいらっちゃって、19世紀ごろから知識人の方がいらっしゃるわけですが、例えばエジプトのアフラーム紙という官製新聞を作ったのはシリア人ですよ。それぐらいシリア人は、アラブのジャーナリズムを過去140年間以上にわたって担ってきた人たちののです。

ですから、歴史的シリアという意味では、やはりエドワード・サイードなどもそういう土壌から生まれて、世界で起こっているパレスチナをめぐる歪んだ見方を修正するようなことができる文化的背景を持った方は、実はこのシリア地方の地中海東側からつねに出てきているのです。ナジーブさんはそういう流れを受けた存在であると私はずっと思っていて、オヤジギャグはよく外すのですが、大変稀有な方だと思っています。

もう一つのポイントは、最後にナジーブさんが言ったとおり、やはりシリアはいろいろな力学がかかって、スペイン内戦のようにジョージ・オーウェルが人民戦線に加わって『カタロニア賛歌』を書き、ヘミングウェイも同じく参戦して『誰が為に鐘は鳴る』を書くということがなかなかできないようになっていきます。例えばクルド問題に関しても、私はちょっと漫画の校正をお手伝いしたのです。これはイタリアでものすごく売れたのですが、イタリアの漫画家がシリアのクルド地域に入って漫画にしたのです。これを私の友人のイタリア語翻訳家が翻訳して、私は固有名詞などをちょっとチェックしただけですが、これが大変面白い本なのです⁴⁵。

これは、ナジーブさんがおっしゃることそのままなのです。シリアで起こっている

⁴⁵ ゼロカルカーレ、『コバニ・コーリング』、栗原俊秀訳、花伝社、2020年。

問題をいかにクルドの人から見て、クルドのまなざしをイタリアの作家がいかに内面化して、クルドの思いをいかにシリアの問題の全体像から切り離して部分的に伝えるかという、ネガティブな面もあるのです。ですから、先ほど岡先生も言ってくれましたように、例えばハーフェズ・アサド政権の独裁に反対する民主化組織に加わったゆえに1980年から1996年にかけて16年にわたって監獄に収監された経験、ならびその後の人生やシリア社会の変容を自己抑制的な筆致で綴った『シリア獄中獄外』を訳して、日本の世論に一石を投じたいと思ったのも、どうしても部分的な問題に縮小されてしまう流れがある中で、やはりシリアの問題は世界の問題と全体的にどういうふうにつながっているかということを常に考えなければいけないと思ったからです。特に学生の皆さんには部分的な問題はしっかり見ていただきたいと同時に、全体としてはこういう問題なのだということも感じていただきたい。そういう意味で、今日のナジーブさんの講演は、そうした全体像を私たちにもものすごく分かりやすく、そして面白く伝えていただいたということで、私は大変良かったと思います。どうもありがとうございました。

岡 岡崎さん、ありがとうございます。今、岡崎さんがナジーブさんのオヤジギャグに言及されましたが、解放区での闘いを描いたドキュメンタリー『娘は戦場で生まれた』⁴⁶ という映画でもそうなのですが、あの爆撃の状況の中でも、みな、ジョークやユーモアを言うのですよね。「今日は包囲された記念日ね」とか、一番深刻な状況に陥ったときにそれを笑いにしている。だから、そうしたユーモアやジョークというの、私はHomelandの問題と切り離せないのではないかと、Homelandにとどまり、そこでどう闘い、生き抜いていくか、あるいは難民や移民となって異邦で生きていくという上で、すごく大切な力なのではないかと思うのです。

ナジーブさんは精神的にもすごくおつらいと思います。「あなたは内戦のシリアにいらなくて幸運だったですね」と思う人はいるかもしれないけれど、自分のワタンがめちゃくちゃになっていくのを遠くから何もできずに、ただ見ていることしかできないというのは、すごくしんどいことだと思います。だから、ものすごく好意的に解釈すると、ナジーブさんのオヤジギャグは、そのつらさを乗り越えるためのものなのではないかと考えています。

ナジーブ 自分で言うのも変なのですが、本当に私にとってユーモアは自分を守る武器でもあったりします。それはシリア人だけではなくて、フィリピンもそうだったそうですね。フィリピンも内戦のときに、日本の占領軍や独裁者に対してすごくユーモアを使うのです。

実は本日12月18日は世界アラビア語の日です。1973年12月18日に、アラビア語が国連の6つ目の公用語として定められました。今日は本当に特別な日なのですが、多分その6つの公用語の中でアラビア語、アラブ文化が一番困っています。例えば、アラビア語で1年間に出版される本は日本語よりはるかに少ないし、文化・文明とし

⁴⁶ ワアド・アル＝カデブ監督、2019年、英・米・シリア。原題は“For Sama”。

ては危機に瀕しているのですが、それでもみなさん、懲りずにぜひアラビア語を勉強し続けてください。

ちなみに、1973年12月18日の次の日に何が起きたかという、私が生まれました。

岡 明日がお誕生日ということですね。

ナジブ そうです。ホテルには朝までしかいないのですが、ケーキなども大歓迎です（笑）。

岡 それでは、長時間にわたって、皆さん、ご参加ありがとうございました。ナジブさんもたいへんお疲れさまでした。

ナジブ ありがとうございます。

岡 これをもって今日の講演会を終了とさせていただきます。

〈 了 〉

講演録

ワタンの100年 ～シリア近現代史から考える Homeland～
ナジーブ・エルカシュ

作成：ワタン研究プロジェクト

編集：岡 真理

編集補助：中鉢 夏輝（京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科）
西道 奎（京都大学総合人間学部）

表紙デザイン・レイアウト：西道 奎

発行：2022年4月13日

連絡先：プロジェクト・ワタン事務局

projectwatan3@gmail.com

<http://www.projectwatan.jp/>

© Najib El-khash, Mari OKA 2022